

# Faculty Newsletter

## 教育学部ニューズレター

第 392 号 (2017.11.22) 発行: 埼玉大学教育学部 FD 委員会

### 第 37 回教育学部大久保農場収穫祭のご報告

教育学部大久保農場主任 荒木祐二 (技術分野)

11月10日(金)に埼玉大学教育学部大久保農場にて、ものづくりと情報・技術分野の「栽培技術の基礎(実習を主とする)」受講生一同ならびに大久保農場が主催する収穫祭が行われました。

当日は大学から齊藤理事兼副学長、財務部経理課の大泊氏、教育学部から萩生田先生、榊原事務長代理、藤田学務係長、大関氏、佐藤氏がご参加くださいました。また、さいたま市長からメッセージを頂戴しました。

司会は技術分野1年生の島崎君が務め、はじめに農場主任の筆者が収穫祭の趣旨説明と大久保農場の活動概要を述べました。つづいて齊藤理事から、「この度が6回目目で最後の参加。卒業生を対象としたアンケートの結果、埼玉大生に身につけてほしい項目の1位は“コミュニケーション能力”である。これを栽培実習で身につけて磨いてほしい。」といった受講生を励ますご挨拶を賜りました。続いて、榊原事務長代理から「学生の皆さんには事務室へ来てほしいが、問題を起こしてから来ないで(笑)。農場の発展を祈念して乾杯。」というご挨拶と乾杯の音頭の下、宴が始まりました。

歓談の合間には、浅子技能補佐員の前任者である細田先生より「浅子さんの前任者として29年勤務していた。かつて農場は日進にある特別支援学校にあったが、昭和57年に大久保へ移転した。これ以降、ここで収穫祭が続いている。収穫祭は農家にとって一年でもっとも嬉しい時期に行う行事。天皇家でもこの時期に行っている。地元の北本市で卒業生たちに会うが、みんな他で学べないことを習得できた楽しい思い出として収穫祭を覚えている。コミュニケーションは大切。永遠に続けていただきたい。」という大久保農場の歴史を交えたご挨拶を頂戴しました。その後、農場講義室内のプロジェクターを利用して、浅子技能補佐員より栽培実習のようすが上映されました。実習生たちのクセの強い写真に会場からは笑いが起こりました。つづいて受講生による余興があり、



女性芸人のいいで立ちで栽培に絡めたネタを披露したり、リズムに合わせたきわどい踊り(?)が披露されたりして会場は爆笑に包まれました。最後に全員で埼玉大学歌を斉唱し、前農場主任の石田先生による「栽培・農業は大事。園芸療法は老若男女問わずみんなに効果がある。土に触れ、種をまくことでストレスが解消され、やる気が高まる。農業従事者は一般人と比べてストレスの度合いが1/3というデータもある。SDGs(持続可能な開発のための2030アジェンダ)では17の目標を定め、6つの課題が設定されている。そのうち3つは栽培・農業に関連することから、栽培は

いろいろなことで世の中の役に立っている。農場を残してほしい。学生、若い人に頑張してほしい。栽培も文化である。伝統ある行事を今後も続けてほしい。」という中締めのご挨拶をもってお開きとなりました。

収穫祭は五穀豊穡を祝うとともに、大久保農場の運営にかかわる皆様との親睦を図る貴重な機会ととらえております。同時に、それまで何気なく栽培実習を受講していた学生たちが、自分たちが育てた作物の品質をご来賓の方々に評価していただく経験をとおして、実習の意義と達成感を味わえる行事です。受講生が主役となって役員や教職員の皆様を招待し、厳かなながらも和気藹々と楽しめるこの収穫祭が、これからも農場運営に携わる皆様と受講生らの交流の場になることを願っています。今後も大久保農場の活動にご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## 収穫祭を終えて

福井大翔（ものづくりと情報分野2年生）

私たち受講生は、4月上旬から収穫祭まで7ヶ月をかけてサツマイモやイネなど様々な作物を育ててきました。春からこれまでの集大成として私たちは収穫祭の日を楽しみにしていました。収穫祭に向けて受講生同士で話し合って会場係、余興係、会計係、司会係、料理係に分かれ、それぞれが自分たちに与えられた仕事を全うしました。会場係は収穫祭に向け、いすや机の設置や飾り付けなどの会場準備などを各々が積極的に行い、時には持ち前の仲の良さで協力しながら収穫祭がより充実するようにと尽力しました。余興係の準備は収穫祭の1時間ほど前までにも及び、念入りに打ち合わせを行い、今流行りのブルゾンちえみさんのもの



まねを映像で、アキラ100%さんのものまねは実演して、見事やりきって会場に大きな笑いを巻き起こしました。料理係はモツ煮やおでんなどの調理や料理の盛り付け、配膳などを協力して行い、収穫祭本番で料理が振る舞われました。自分たちが育てたお米やサツマイモなどの作物であること、料理係により丹精込めて作られた料理であること、収穫祭の参加者みんなで食べる食事であることなど相まって何にも変えられない食事となりました。会計係も職務を全うし安定感を示しました。そして何よりも司会の島崎くん（技術専修1年生）の頑張りがよく光りました。まずは係決めを先導して行いまとめ上げ、本番では緊張もみられましたが一度も嘔むことなく時には臨機応変に対応し、しっかりと進行してくれたため盛り上がり、にぎやかなながらも締めのある収穫祭となりました。

収穫祭ではいつもお世話になっている埼玉大学の事務の方々や、以前に大久保農場の管理をされていた浅子さんの前任の細田先生、荒木先生の前任の石田先生、さいたま市長といった普段は直接関わることはないながらも自分たちを支えてくださっている方々から、ありがたいお言葉を頂戴したり、普段聞くことの出来ないお話をさせていただきました。また、普段なかなか関わることのできない栽培研の先輩方とお話する機会にもなり、これからのことについてさまざまな面でアドバイスをいただき、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。日常関われないような方々と関わる事が出来たこと、普段お世話になっている方々が笑顔でおいしいと言ってくださったこと、非常に充実し盛り上がった会になったこと、荒木先生、浅子先生のご指導の下これまで頑張ってきて非常に良かったと思えた、そんな収穫祭となりました。

## 収穫祭の感想

岩本能梨子（ものづくりと情報分野2年生）

11月10日に、第37回大久保農場収穫祭に参加した。前々から収穫祭に向けて、役割を決めたり、校歌の練習をしたりと準備を進めてきた。正直あまりイメージはわいていなかったが、去年の参加者の「楽しかった」という言葉を聞き、期待していた。

当日準備は、机の移動やホワイトボードの文字、部屋の飾り付けや千葉君の書いた看板をなぞる作業を担当した。ホワイトボードは去年の写真を参考にして、見やすく書くように心がけた。そのホワイトボードを装飾するために、折り紙で野菜を折った。去年の写真などを見ると、折り紙で作ったわっかで装飾しているだけであったが、野菜を作るというのは、なかなかの名案であったと思う。トマトやナスなどの実際にわたしたちが育てた野菜や、トウモロコシやニンジンといった、実際には大久保農場では育てていない野菜を作ったりもした。



装飾が終わった後、調理が大変そうであったので手伝った。そこで、わたしは人生で初めておにぎりをにぎった。水を付けないと米粒がたくさん付いてしまい驚いた。三角ににぎることができるか不安であったが、すぐにできるようになった。栽培学研究室の石塚さんや同じ受講生の渡部君たちと協力し、開始時間ギリギリに完成させることができた。

収穫祭が始まり、おでんやもつ煮、おにぎりやその他のお総菜や漬け物を食べながら楽しんだ。前任の先生のお話を聞き、いつから大久保農場収穫祭は始まったのか、また今後も続けていって欲しいという願いを聞いた。法律ギリギリの余興も、曾我君と渡邊君が出てきた瞬間「あ、これは大丈夫なのか」と思い、来賓の方たちの様子を見たが、思いの外大ウケしていて安心した。来年度の余興も未来の後輩にムービーを見せてもらいたいと思った。自分たちの農場で育てた野菜を調理し、その料理を美味しく食べている来賓の方を見て、とても嬉しくなった。

収穫祭という言葉を辞書で引くと、「農耕儀礼の一つの段階で、主として農作物の収穫に感謝し、翌年の豊作を祈念する祭り」とある。（日本大百科全書より）大久保農場で美味しい作物を育てることができるのは、収穫祭のおかげかもしれない。このように、日頃お世話になっている方と、食べながら交流できる素敵な行事はずっと続けていくべきであると思った。





第 392 号 (2017.11.22) 発行: 埼玉大学教育学部 FD 委員会